

雜 錄

亞米利加之長尺軌條 (Railway Gazette, march 20, 1931, p. 443) 近時軌條が漸時に長大となりつゝあるやに見受けられるが英國では 60 呎を標準とし佛國のある鐵道では 24m 即ち 78'~9' に増大されんとして居るに對し加奈陀及び亞米利加之鐵道では其の標準にして居る 33 呎及び 39 呎を未だに固執して來たものである、然るに最近亞米利加之リハイ、ウアレイ鐵道では過去 2 箇年間に 66 呎軌條を實驗して來た結果は甚だ好成績を収め得たので米大陸の他の鐵道も之を適當なりとして追従するらしいと報ぜられて居るのは甚だ興味深きものがある、特に最近モントリオールから市俄古まで 848 哩の線路全部を 130 封度(亞米利加で使用する最も重い軌條)の平底軌條に交換する事を決定した加奈陀ナショナル鐵道は 66 呎軌條を使用するらしい、軌條の標準を長尺ものに變更することを妨げた主なる原因は從來北米殊に加奈陀に於ける氣候が激變し其寒暑の差が甚しく爲に軌條は異常に膨脹し且收縮する、加奈陀の或る方地では霜が可なり深く地面に滲込む所があり保線工夫は 3 月から 4 月迄の霜解季節中には極度の膨脹に依つて生ずる軌條の匍進や其他の線路の缺陷を補正するに當つて言ふ可からざる困難に遭遇して居ると言ふのであつた、乍併假之北米の氣候が北獨逸(本誌 2 月 27 日號参照)よりも酷烈であるとしても同地方で 30m (98'~53/4") の軌條が現在幹線に標準として使用されて居る事に疑問が生ぜざるを得ない、此關係に於て近く英國鐵道で 60 呎軌條の代りに 50 呎軌條を使用して一定期間實驗を行なふ企てが有るらしいといふことは甚だ興味深いことである (Y. U. 生)

ベルギー工業概況 (昭和 6 年 3 月 2 日附 5 月 13 日著、在ベルギー芦田臨時代理大使報告)

白國の一般經濟狀況 主要工業の生産狀態 鑛業—石山—金屬工業—窯業—硝子—化學工業—

白國の一般經濟狀況 白國工業の復興は戰爭終局の時期より今日迄の階梯を 3 期に分ち得べし

即ち 1919 年より 1920 年末迄は所謂純然たる復興の時代にして、1913 年度以後衰頹し居たる生産は此期間に於て漸次舊狀に復歸せり、1920 年後半期より 1921 年の秋迄一時的飽和時代とも謂ふべく經濟不況にして生産減

少し失業者急に増加せり

而して 1921 年末より生産再び増進し失業者も減少し、1926 年には金融恐慌發生したるに拘らず 1928 年に入りて産業は一般に最好況を呈し、遂に 1913 年以前の生産額を凌駕せり

1913 年以降主要物産總生産量及失業者基金加入者 100 人に對する平均失業率を表示せば前述の現象は一層明白となるべし

主要物産生産量 (單位 1,000 噸)

年 度	品 名	石炭	銑鐵	亞鉛	綿絲	紙	窓硝子 (單位 1,000 m ²)	平均失業者 %
1913		22,842.5	2,484.2	204.2	45.4	160.0	41,709	—
1920		22,378.7	1,116.4	84.2	41.8	106.1	26,450	—
1921		21,750.4	872.0	66.1	33.4	87.7	18,085	21.2
1922		21,208.5	1,613.1	112.2	41.6	121.6	33,708	6.5
1923		22,922.3	2,147.9	147.0	45.1	129.6	36,325	2.7
1926		25,229.6	3,368.3	188.7	58.7	155.8	52,251	4.1
1928		27,578.0	3,856.9	206.3	68.6	181.4	53,270	4.4
1929		26,932.0	4,095.9	201.3	69.9	188.7	61,664	4.7

當國工業回復の迅速なりしことは素より白國人の經濟的知識の發達し居ること、且其努力の結果なるが又他方に於て當國の工場、炭坑等が北佛の工場及炭坑の如く破壊せられずして占領軍に利用せられ居ること、休戦後殘存工場に新規機械を容易に据付得たること等の事實を看過すべからず

1926 年に起れる白國金融恐慌の結果、政府は白貨の平價切下を以て貨幣を安定したるが、輸出は之が爲却て獎勵せられ生産益増加し、1928 年頃當國經濟狀態は最も隆盛となれるは前述の通りなり、例へば 1923 年 165,000 萬 K. W. H. 時なりし電力消費量が 1929 年には 415,000 萬 K. W. H. となりたる事實を見ても其繁榮を想像し得べく、又 1913 年及 1928 年の輸出入並通過貨物量を對照すれば下の如き増加を示せり (單位噸)

年 度	輸 入	輸 出	通 過
1913	32,656,833	20,885,182	7,803,734
1919	4,768,534	6,908,373	1,614,933
1928	39,868,262	26,749,398	17,612,462

入港船舶噸數も著しく増加し 1913 年 11,505 隻 16,907,417 噸に對し、1928 年 18,678 隻 28,960,328 噸となり居れり

鐵道収入は 1920 年 880,578,000 法より 1929 年 2,894,000,000 法に達し、貨物輸送量は 1913 年 66,541,975 噸に對し、1920 年 50,257,962 噸(75.5%) 1929 年 76,590,000

噸(116%)となれり

然るに其後白國工業も一般生産過剰に伴ひたる世界的不景氣の影響を被り輸出減退し、1929年末より經濟界は各方面とも不況に陥れり

以上經濟的危機の原因に關し當國の有力企業會社たる Compagnie belge pour l'Industrie 社の社長は 1930年株主總會に於て爲したる報告中に大要次の如く述べたり

世界的不況は要するに生産と消費との不調和に起因するものなり、大戰の生じたる經濟上及金融上の變調の結果生産機關の著しき増加を見るに至れり、即ち戰爭中は各國に於て外國製品の供給を仰ぐことを得ず、在來の工場を擴張し若は新規工場を建設して自給を計り、又大戰後に至りても物資の不足は價格を騰貴せしめ生産の増加を奨励し、破壊せられたる機械は之を替へ耕地を開拓し新鑛脈を開鑿し進歩せる技術を應用したる爲、生産其のもの及生産能率は頓に増加したる次第なり、貨幣の下落は成金風を吹かせ公私の支出激増し、又金融市場は有價證券の發行を容易にし、信用は從來より廣く行はれ以て新規事業の開始を助長せり、然るに生産に對應して増加し來れる消費は經濟的或は政治的變動の爲急に減少し、他方各國が關稅障壁を益高めたる結果、物資の流通阻止せられ穀物を始とし各種の原料のストック滯滞して市場を壓迫するに至れり

經濟界を救濟せんが爲には一方には生産費の緊縮を必要とすると同時に、他方價格の激變を防ぎ投資せられたる資本に對し相當の収益を保證する爲價格の維持を計らざるべからず、其の一手段として生産者は國內的に又國際的に提携し協定を遂ぐるを急務とす

以上は一般經濟界の現状を良く描きたるものにして、白國經濟も或程度迄其指摘せる困難に苦しみつゝあり、而して救濟策として居る企業者の提携、企業の合同、共同機關の構成等は當國に於ける顯著なる現象なり、殊に鐵工業、化學工業、硝子工業等に行はれ其成績概して良好なり

白國は食糧品は素より、石炭業及セメント業を除ける外の主要工業の原料は之を輸入に仰げるものなり、他方農工總生産の 52% は輸出せらるゝのみならず、或工業は其生産の大部分を外國に賣り居れり。(硝子 95%、亞鉛 66%、セメント 67%、展延鐵材 54%、且金額に於ては毎年金屬及金屬製品 80 億法、紡織生製品 40 億、硝子 15 億法を輸出し得る生産剩餘あり) 依て物資の自由流通は當國にとり生死の問題にして、其常に關稅障壁低下を主張する理由は茲に存せり、消費の減退を示せる現下の不景

氣は白國に對し經濟上の大打撃たるは言を俟たざる處なるが、當國工業を通觀せば他國に比し一般に有利にして失業者も極て少く目下の危機に際し尙相當の持久力を有すること注目に値す、其理由は主として投機的擴張を爲さざりしに依ること勿論なるが、又白國が原料を生産せざる爲必要に應じ之を買入れ手持過剰の危険を免れ得ることは大なる強味なり

斯くて白國の主要工業の生産額は著しく減じ居るも、不況の爲衰微したるものにあらずして、單に減産を實行したるに過ぎざるものなり

主要工業の生産状態 I 鑛業 (I) 生産 鑛業中石炭業は鐵工業に亞ぐ白國の主要工業の一にして、國家經濟上極めて重要な地位を占む、炭鑛業は大戰以來一般に發達したることは次に記述する通りなり

(イ) 石炭、主要産地はエーノー、ナミュール、リエージュ及ラムブール諸州にて 1928 年現在炭坑數は 266 (内豫備 12, 未開 11) にして 1913 年に比し炭坑は 45 の減少を示し居るも、生産量は約 1 割 8 分増加し居れり、其大要次表の如し

石炭産出量

年次	噸數	1箇月平均噸數	比率
1913	22,841,590	—	100
1919	18,482,880	1,545,000	80.8
1923	22,922,340	1,910,000	100.3
1926	25,229,600	2,110,000	110.5
1929	26,932,000	2,245,000	117.9

以上の如き生産の増加は採掘の技術の進歩及カムピオン地方の炭山の著しき發展に因るものなり、機械採掘に依る生産割合は 1924 年は 53.9% に過ぎざりしも 1927 年には 81% に達したり、機械使用の結果労働者數は減じたるも(月平均労働者數 1927 年 175,544、1928 年 159,570) 1人當り産出量は増加したり、(1人當り平均産出量 1927 年 517 kg、1928 年 565 kg)

生産の状況は以上の如く良好にしてル白兩國の需要(約 38,500,000 噸)は生産量より大なるに拘らず、本業は 1929 - 30 年に至り世界的不況及外國炭のダンピングの影響を蒙り不振、一時 378,000 噸に下りたるストックは 1930 年 1 月には 498,000 噸に、同年 7 月には 1,719,000 噸に昇りたり

(ロ) コークス、産出も激増し其大要次の如し

年次	噸數	比率
1913	3,523,000	100.0
1919	756,890	21.5
1923	4,179,964	118.7
1926	4,961,683	139.6
1929	5,991,100	170.0

然るにコークス用石炭中、外國炭は 1913 年には全消費量の 4 割に達せざりしが、1924 年には 6 割を超過し

爾來漸減したるも今尙割合に於て 1913 年より遙に多く (52%) 數量に於ては約 2 倍半に達し居れり

○コークス用石炭消費量及外國炭割合

年次	總消費量(噸)	外國炭消費量	外國炭割合%
1913	4,601,700	1,795,500	39.0
1919	987,100	1,100	0.1
1923	5,631,600	3,186,500	56.6
1926	6,754,900	3,481,700	51.5
1929	9,548,300	4,970,400	52.0

尙コークス副産物の生産次の通り。(單位噸)

類別\年度	1923年	1928年
小コークス	135,511	211,280
グレゾール	118,288	207,860
瓦斯(單位 1,000m ³)	254,155	641,621
硫酸アムモニア	52,422	86,230
ベンゾール	21,735	44,770
コールタール	113,182	196,280

炭業不景氣救済策として 副産物利用及石炭を原料とする抽出工業あるも、(殊にベンゾールの揮發油化) 未だ確定的成績に達せず。

(ハ) 煉炭、生産は年々減少し、ブリケットの如きは 1929 年の生産量 1913 年の 76.5% に過ぎず。

(2) 輸出入 自國は石炭、コークス、煉炭を輸出し、其總噸數は 1929 年 5,270,000 噸に及びたるが、左は 1913 年より 16.5% 少し。他方コークス用外國炭の輸入も多く、1929 年には 14,964,000 噸に及びたり。

1923 年以降の輸出入を表示すれば次の通り。(コークス及煉炭は消費石炭に換算)

年次	輸 出		輸 入	
	噸 數	比率	噸 數	比率
1923	3,561,300	100	8,936,000	100
1924	3,404,000	95.5	11,842,000	132.5
1925	4,061,000	114.0	11,165,000	124.9
1926	5,330,000	149.6	10,636,000	119.0
1927	4,448,000	124.8	12,272,000	137.3
1928	5,680,000	159.4	11,635,000	130.2
1929	5,270,000	140.8	14,964,000	169.8

然るに 1930 年の前半期の輸出は前年同期と同額なりしも石炭の輸入は 133,000 噸、コークス 211,000 噸増加したり。

(3) 企業者團體 石炭業は從來 Banque de Bruxelles 及 Société Générale の二大系統に屬したるが、1928 年 1 月以上兩銀行間の協定成立し、リエージュ地方以外の炭山 (48) を網羅する Comptoir Belge des Charbons industriels (資本金 500 萬法) 及一切のコークス生産者を網羅する Syndicat Belge des Cokes et Charbois à Coke (資本金 100 萬法) 共同出資の下に設立せらるゝに至れり。兩者は密接なる關係を保つ爲共通の中央局を設け、之をして國內及國際政策を講究し兩團體の決議を實行せしむ、以上中央局は佛、白、ル、蘭、獨に對する

本組合の生産の專賣權を有す。

II 石山 (1) 生産 1913 年に於ける自國石山の數 1556 なりしが、1919 年には僅に 755 を算し、1928 年には漸く 886 となり、大戰前より甚だ少かりしも其生産額 (金額) は約 5 割を増加せり。

○石山生産額表(單位金白耳義 1,000 法)

年次	金額	比率
1913	70,600	100.0
1920	80,000	113.0
1922	88,100	125.0
1924	95,000	134.5
1926	86,000	121.8
1928	106,000	150.0

大戰前は御影石は全生産額の 24% を占め、石灰 (18.6%)、素石 (14.7%)、雲斑敷石 (25%) 之に亞ぎたるが、1928 年は石灰第一位を占め居れり (28.8%)。最も著しき増加を示したるものはセメント用泥灰石なり。(1913 年 272,080 m³、1928 年 3,100,750 m³、總生産額に對し 0.4% より 4.0% に移れり)

セメント業は其原料を凡て自國內に産する當國に取りては極めて重要な工業なるが、近年其の發達は見るべきものあり。1913 年の生産能力は 1,750,000 噸 (實生産 1,500,000 噸) なりしが、1929 年には生産能力は 400 萬噸 (工場數 33) に上れり。自國は斯くて一大セメント生産國となりたるのみならず、(1927 年の實生産は生産能力の 91% にして、(人口 1 人當 2 樽に相當し世界第 1 位に在りたり、米 1.46、丁抹 1、諾威 0.6、獨 0.7) 生産の 7 割弱 (1925 年 60%、1926 年 65%、1927 年 67%) は輸出せらるゝを以て、自國はセメント輸出國の筆頭に位するに至れり (1927 年の輸出額は 34,000 萬法に及びたり)。然るに 1928 年末より販路維持は益困難となり、北米合衆國の新關稅率實施は自國當業者に大なる打撃を與へたり。

從來の輸出先は主として和蘭、南米諸國 (殊にアルゼンチン) 北米、英國、埃及及モロツコなり。

(2) 輸出入 當業の輸出は輸入を超過し 1929 年輸出 1,061,105,000 法、輸入 739,632,000 法なり。主要輸出品はセメント 43.4%、セメント製品 10%、建築用石材及疊石 8%、石灰 7.6%、大理石 3.6% を占む。輸入總額中の 42.1% は加里鹽及硝石なり。

(3) 企業者團體 セメント業者間には未だ一般的協定なく内外共に競争激甚なるが、其内部分的協定の成立したるもの次の如し。

(1) Union des Cimenteries (11, Rue Fossé aux Loups, Bruxelles) は白、蘭、佛、ル及獨逸に於ける數会社の販賣機關なり。

(ロ) Fédération des Cimenteries は上記 Union の販路に非ざる國に對する輸出を目的とす(五會社)。

(ハ) Comptoir des Chaux et Ciments du Tournaisis, Tournai 地方業者組合。

(ニ) Comité des Ententes (45 Bd. du Régent Bruxelles) は 1927 年 7 月 2 日構成せられたる團體にして外國業者との協定を管掌す。今日迄成立したる國際的協定は 1、白獨業者間に(a)和蘭に於けるセメント販賣、(b)白國に於ける獨逸産セメントの販賣、(c)獨逸に於ける白國産セメントの販賣に關する協定なり。2、佛白協定、白蘭に對する佛國セメントの輸出及佛に對する白國セメントの輸出を協定す。

尙白國生産者の職業的中央大機關たる Groupement Professionnel des Fabricants du Ciment Portland Artificiel de Belgique なる團體 (45, Bd. du Régent, Bruxelles) あり、其内にセメントの品質を檢査する機關を設けたり。(1926 年 2 月成立) 尙砂石、雲斑石、御影石の販賣組合あり。

III 金屬工業 (1) 生産 (イ) 鐵工業、本業は白國の最重要工業にして母工業の稱あり、銑鐵の生産高は 1929 年度 4,095,940 噸に達し、鐵鑛の輸入 1,300 萬噸を超過したるに照し、其如何に大規模なるかを窺知すべし。

鐵工場の所在地 Hainaut Brabant 地方、Liège 地方及 Luxembourg 地方にして、熔鐵爐數は (1929 年 1 月現在)

エーノー・アラバン地方	29(内休2)
リエージュ地方	28(内休3)
ルクサンブール	4
合計	61(内休5)

(A) 1913 年の銑鐵生産高は 2,485,000 噸なりしが、大戰後數年間は復舊せず、1924 年に至り始めて 1913 年の生産量に復歸したるが、爾來漸増し 1929 年の生産は 1913 年に比し 6 割 5 分増なり、詳細次の如し。

○銑鐵生産表

年次	噸數	比率
1913	2,484,690	100.0
1919	250,570	10.1
1920	1,116,400	44.9
1924	2,843,920	114.5
1927	3,709,090	149.3
1928	3,856,990	155.2
1929	4,095,940	165.0

然るに 1930 年に至り前半期の生産高は前年同期に比し 8% 減を示し居れり。(尤も諸外國に於ても同様にてルクサンブール 9.3% 減、英國 10.5% 減、米國 18% 減、獨逸 21% 減を示し、獨り佛國は生産を維持し居れ

り)

前記銑鐵生産高の内大部分は鋼鐵用原料として消費せらる。(1928 年産總生産 3,856,990 噸の内鋼鐵用 3,660,750 噸)

(B) 鋼鐵の工場は 1913 年 33 に及び、其内 15 は主として鋼鐵製品を作製し居れり。

鋼鐵の生産も 1913 年に比し 6 割 6 分増加し其内鋼鐵製品は 2 倍したり。

鋼鐵生産表

年次	總生産(噸)	比率	鋼鐵製品(噸)	比率
1913	2,404,780	100.0	61,580	100.0
1919	321,870	13.4	11,790	19.1
1921	721,110	29.9	43,040	69.6
1925	2,480,000	103.1	68,083	110.0
1927	3,604,070	149.9	76,100	123.0
1929	4,011,180	166.5	121,230	200.0

(C) 鍊鐵の生産は之に反し激減し、1928 年は 1913 年の 10% に下りたるのみならず、需要は益減少し近き將來に於て其生産は絶ゆるものと觀測せらる。1928 年には工場僅々 3、鍊鐵爐數は 1913 年 110、1928 年には 15 個に下れり。

○鍊鐵生産表

年次	生産	比率
1913	147,100	100.0
1919	23,670	16.1
1921	40,700	27.7
1925	13,150	8.9
1927	21,790	14.8
1928	14,880	10.1

(D) 仕上品(ロール製品)、鋼鐵製品は 1913 年 1,857,860 噸、1929 年 3,556,440 噸即ち 9 割の増加を示せるも、鋼鐵製品は之に反し 304,350 噸より 163,240 噸に下りたり (53.6%) 之を表示せば次の通り。(單位噸)

年次	鋼材生産	比率	鐵材生産	比率
1913	1,857,860	100.0	304,350	100.0
1919	342,160	18.5	68,895	22.7
1921	837,030	45.0	159,270	52.4
1925	1,814,561	98.0	100,841	33.1
1927	2,669,540	143.7	172,410	56.6
1929	3,556,440	190.0	163,240	53.6

1928 年中活動せる展延機數は 46 臺なり。

(ロ) 電機製作、大戰前に於ける白國の電機業は専ら大型機械(ダイナモ發電機等)、蓄電池ケーブル、アーク燈の製作を主としたるが、戦後は新機械を据付け各種機械の製造に着手したるのみならず、生産量は夙に國內需要を超過し輸出を爲すに至れり。目下斯業の工場數は約 60 あり、其使用労働者 40,000 人なるが、關係副業の労働者數も略同數に及べり。斯業の發達が急速なりしことは 1925 年の輸出額約 8-900 萬法なりしもの、1929 年に 35,900 萬法に達したるを見ても之を證するに足る。

斯業の主なる會社は約 50、1925 年に當業者の經濟的、職業的及技術的利益の保護を目的として Association des Constructeurs de Matériel électrique de Belgique (35, Rue de Ruysbroeck, Bruxelles) を組織したり。

(ハ) 自動車製作、自國に於ては主として高級自動車を製作し居り、其生産數は 1913 年 5,600 臺にして、1923 年 3,642 臺、1925 年 5,639 臺、1928 年 7,700 臺 (内乗客用 6,500 臺、荷物用 1,200 臺) となれり。

目下自動車の製作に従事するものに三大會社あり、Impéria-Excelsior は Impéria, Excelsior, Auto-métallurgique, Mathys et Osy, Nagant 諸會社の合同、Minerva Motors 及 F. N. (Fabrique Nationale) H. Minerva, F. N. は内外販賣に關し協定し居れり。

(ニ) 武器、武器はリエージュを中心とする一大産業にして、製品は凡て中央検査所の検査を経るに非ざれば發賣を許されず。製品の数は 1913 年に比し約半減したり、(1913 年 1,377,968 個、1920 年 679,965 個、1922 年 246,665 個、1923 年 554,070 個、1928 年 616,409 個)

(ホ) 亜鉛、鉛其他の金屬工業、亜鉛の生産は主としてムーズ河岸(リエージュを中心とし)に行はるゝが、全國工場數は 1923 年 13 にて戦前と大差なく、技術的進歩の爲熔爐數及熔穴數は減少し (1913 年熔爐數 510 熔穴數 43,431、1923 年熔爐數 209 熔穴數 38,713) たるも生産には大差なし。(1913 年 204,220 噸、1928 年 206,300 噸) 然るに國內の亜鉛鑛脈は數年前より殆ど絶へ鑛石は輸入せざるを得ざるに至りたる處、昨今亜鉛の市價暴落するに及び生産引合はず、目下の狀況繼續せば當國の亜鉛精鍊業は休止せざる可らざるに至るやも計られずと觀測する者もあり。

○ 亜鉛生産表

年次	噸數	比率
1913	204,220	100.0
1919	19,860	9.7
1921	66,150	32.4
1925	170,860	83.7
1927	199,090	96.5
1929	201,380	98.6

延亜鉛工場は 9 個あり、内 5 會社は亜鉛熔爐をも經營し居れり、展延装置全國に 48 個あり、1928 年生産は 63,500 噸 (1913 年の 33. % 増)、亜鉛の展延は 1920 年より既に 1913 年の生産高を超過し年々漸増し居れり。

前述の如く亜鉛鑛は内地産のものにて不足なるが其消費及輸出入の狀況大要次の通り。

年次	消費		輸入 輸入噸數
	鑛石消費噸數	酸化亞鉛消費噸數	
1913	480,545	8,035	—
1921	257,950	22,210	276,086
1924	370,920	23,340	459,283
19 6	429,663	35,013	587,244
1928	431,860	28,750	501,501

鉛、銀、銅、錫、ニッケル、アンチモニー其他の工場 10 個あり、1927 年の主なる生産次の通り。

鉛	25,570 噸
工業用鉛	66,140 〃
銀	123,043 kg
金	2,133 〃
粗銅	8,860 噸
精銅	950 〃
銅合金	17,520 〃
亞比性無水體	5,580 〃
ニッケル	
アンチモニー	

(2) 輸出入 各鑛石の 1929 年の純輸入量は次の通り。

(單位噸)

アルミニウム	2,494	錫	1,249
アンチモニー	978	鐵	22,230,071
銀	25	マンガン	328,240
亞比	10,812	鉛	40,712
銅	50,761	亞鉛	554,195

金屬及金屬製品(機械、車輛、武器等を含む)は 1929 年當國總輸入額 31,564,240,000 法中 5,555,414,000 法即ち 14.2 % を占め、其輸出額は總輸出額 30,145,421,000 法中 8,332,256,000 法即ち 28 % に相當す。尙之を細別せば

品名	輸入額 (千百法)	割合 (%)	輸出額 (千百法)	割合 (%)
金屬及其加工品	2,892,600	51.1	6,538,370	77.6
機械類	1,545,008	27.6	933,641	11.7
電機類	490,601	9.2	358,498	4.2
自動車等	614,048	11.7	327,504	3.9
武器	13,157	0.2	174,243	2.0
合計	5,555,414	—	8,332,256	—

(3) 金屬工業組合 金屬工業に於ける合同の傾向は大戦前より顯著なりしのみならず、販賣に關する機關も多數組織せられたり。1927 年武府に (Union des Industries 會社 (資本 2,500 萬法) 設立せられ、機械 (construction mécanique 及 construction métallique) の輸出の統一に従事す。

金屬工業者の組織する販賣及輸出に關する組合大要次の通り。

(イ) 金屬、(a) 鐵及鋼鐵、Comptoir des Acières Belges, (10, Av. Galilée, Bruxelles)

Entente des Fabricants Belges de Fil Machine 輸出專賣權を有し其販賣機關は Société Commerciale

de Belgique, Ougrée なり。

Entente Belge des Clouteries et Tréfileries 販賣機關 Société Commerciale de Belgique, (Charleroi)

Groupe des Clouteries et Tréfileries des Flandres 販賣機關 Columeta (Arbed)

Société Commerciale de Belgique, Ourg.ée (Socobelge) は Ougrée-Marihaye, Société Belge de l'Azote, Usines d'Alliance-Monceau の販賣機關

Groupement des Bandages et Essieux (Cockeril, Ougrée-Marihaye, Angleur-Athus, Boël 之に加入し居れり。)

Comptoir des Boulonneries Belges, 1, Place du Sud, Charleroi 25會社之に加入し居れり、Gilsoco, La Croÿère, Usines Gilson, Boulonneries de la Louvière, Cambier の販賣機關

亞鉛、銅又鉛、Société Générale des Minerais (Rue du Marais, Bruxelles) : Vieille Mortagne を除ける當業者の販賣機關なり。

(ロ)金屬製品、Entente Belge des Constructeurs de Wagons et Voitures 在外市場に於ける競争防止を目的とす。

Groupement des Constructeurs de Locomotives
Groupement des Constructeurs Belges pour l'Exportation de Matériel de Chemins de Fer et Constructions Métalliques (Wasmès)

Comptoir Bosmans-Gilson (Chaussée de Gand, Bruxelles) (蹄鐵生産者の販賣機關) 白國金屬工業は最近世界市場の傾向に追隨し多數の國際協定に加盟し居れり。其主たるものを擧げれば次の如し。

鋼鐵、Entents Internationale de l'Acier (佛、獨、白、ルクサンプル、ザール、境、洪、チエツコ、波蘭) 1930年に試みたる各國品販賣局 Comptoirs Nationaux の成績面白からず中止せられたるが、カルテルは 1931年7月31日迄延長せられ、1926年生産の3割減を協定せり、且許容量超過1噸に付罰金を4弗に定めたり。

銑鐵、Entente Européenne 價格の協定を目的とし "Luxembourg" 質銑鐵の白、佛、ルクサンプル生産者を網羅す。

レール、Association des Fabricants Européens de Rails (E. R. M. A.) は販賣の中央機關にして價格を統一す、加入國は英、佛、白、ルクサンプル、獨。

鐵管、(Tuyaux de Fer) 獨、チエツコ、波蘭、白、佛當業者のカルテルあり。

管、Entente Internationale des Tubes d'Acier et

de Fer 1926年7月30日 Röhren-Verban (Dusseldorf) Laminoirs à Tubes Tchecoslovaque Réunis, Bismarckhütte Haidki-Dielkie, Usiness à Tubes Franco-Belge Sarroises Manfred Weiss (Budapest) 間成立したる協定にして Abise なる中央監査機關を設け居れり。

Fil Machine 1927年11月15日獨、白、佛、ルクサンプル當業者間に締結せられたるカルテルなるが、價格及生産量の維持調節に努力し好成績を得たり。

針金に關しても獨、佛、ルクサンプル當業者のカルテルに参加す。

木螺施に關する歐洲主要生産者 Syndicat International に加入す。

鋼、世界の主なる生産者を網羅せる國際カルテルに参加するものは白國、Union Minière du Haut Katanga, Société Générale Metallurgique de Hoboken, Société Générale des Minerais なり。

亞鉛、佛、獨、英、波の生産者を網羅する歐洲カルテルに参加す。(海外經濟事情 4・27)

「ドイツ國最近經濟諸統計」の抜萃 (1931年1月-4月)

(昭和6年6月8日附同24日着
在ベルリン帝國商務書記官報告)

◇鐵鋼生産高 (單位噸)

	1931年4月	同3月	同2月	同1月
(A) ローリングミル生産高				
鐵道建築材料	55,308	71,217	72,295	76,122
型物	38,984	32,947	30,724	35,603
小型物	144,865	164,880	151,981	145,026
帶鐵材	24,147	26,851	27,531	25,111
線材	76,752	73,786	59,824	63,358
ユニバーサル・アイゼン	8,740	10,170	8,423	7,733
厚板	40,754	46,212	38,621	44,434
薄板	12,647	17,826	11,476	13,322
黒板	46,278	53,416	42,254	46,154
ブリキ板	11,553	11,631	9,203	8,799
鐵管	36,757	42,634	40,249	39,494
鐵道車輛材料	8,458	9,947	9,250	8,250
鍛冶其他	12,509	13,935	13,652	12,954
其計	9,907	8,134	11,953	12,332
計	527,686	583,636	527,436	539,692
1日平均生産高	21,987	22,443	21,977	20,757
勞働日數	24日	26日	24日	26日
(B) 粗鐵生産高				
ヘマタイト銑	33,801	32,063	30,869	37,665
鑄物用銑	41,778	46,788	34,394	56,368
中間物	370	417	488	644
トーマス銑	372,328	393,616	360,169	413,822

シーメンスマ ルテル銑 鏡	}	80,838	86,441	94,256	90,500
フェロマンガ ン フェロシリコ ン 鍊 其					
計		529,161	560,005	520,176	603,103
1日平均生産高		17,639	18,065	18,578	19,455
労働日數		30日	31日	28日	31日

(C)粗鋼生産高

トーマス鋼	307,680	—	297,785	324,016
ベーシユクシ ーメンスマル ナル鋼	406,254	—	429,606	419,653
酸性シーメン スマルテル鋼	4,570	—	8,723	7,999
坩 埚 鋼	8,697	—	7,779	6,454
鍊 鋼	1,805	—	1,862	1,627
ベーシユク鑄 物鋼	9,443	—	8,270	8,458
酸性鑄物鋼	3,939	—	4,199	4,360
坩埚電氣鑄物鋼	1,053	1,116	1,109	1,011
計	743,341	811,146	759,633	773,578
1日平均生産高	30,973	31,198	31,651	29,753
労働日數	25日	26日	24日	26日

◇石炭生産高 (單位百萬噸)

		1931年1月	同2月	同3月	同4月
石 炭		11'09	9'68	10'50	9'39
褐 炭		10'56	9'24	9'88	9'34
コ ー ク		2'16	1'96	2'06	1'80
石炭ブリケット		0'36	0'32	0'33	0'30
褐炭ブリケット		2'41	2'03	2'16	2'27

自 1925 年至 1930 年 石炭生産高

(單位 1929 年 月割平均を 100 とす)

1925 年	80.7	1929 年 第 3 期	103.0
1926 "	87.2	" 第 4 "	104.5
1927 "	92.5	1930 年 第 1 "	93.4
1928 "	92.8	" 第 2 "	82.9
1929 "	100.0	" 第 3 "	85.2
1929 "	第 1 期 96.3	" 第 4 "	85.6
"	第 2 " 96.2		

主要物産相場

(A)鐵 (單位噸當り)

鐵 棒	Joists	£	4—8—0
鐵 同	Hoops	£	4—4—0
Plates	3/8	£	4—16—0
同	1/8	£	5—0—0
同	3/32	£	5—3—0
同	1/16	£	5—10—0
同	3/16	£	5—15—0
Thomas Wire Rods		£	5—3—6
		£	5—15 0

但 5 月 19 日 C. I. F. 神戸横濱直段

(B)一般主要物産 (5 月 15 日) 單位麻克

(1)金 物

アルミニウム(100kg當)	麻克 布
鉛 (同)	170.00
	20¼—21¾

銅 (99%kg當)	74.00—76.00
ニッケル(98—99%同)	350.00

(2)鐵 鋼

Rohspat (T當)	14.30
Rohblöcke (同)	96.00—98.00
鑄物用銑(同)	83.50
屑 鐵(同)	25.00—27.00
ヘマタイト銑(同)	85.50

(3)石 炭

石炭ルー地方産(T當)	麻克 布
同 オーバーシレジエン産(同)	20.10
ブリケット(同)	16.94
	20.10
(4) (5) (6) 省略	

(7)化 學 製 品

硫安(純分kg當)國內相場	0.86—0.90
トーマス肥料粉(同)同	0.21
石灰窒素(78%100kg當)同	5.95—7.16
過磷酸鹽(純分kg當)	0.85
護謨(100kg當)ハンブルグ	55.00—58¾

(8)紡 織

原棉(1b當)プレーメン	0.44
ユーテ(T當)ロンドン	16磅¾
(海外經濟事情 4 29)	

ギリシャ國の鑛業概観 (昭和 6 年 5 月 15 日附同 6 月

22 日著在ギリシャ川島特命全權公使報告)

ギリシャ國にては鑛業の發達未だ 不充分なるが、今般希臘國經濟省より發刊せられたる1929 年希臘鑛業統計に依り其概況を窺ふに次の如し

○生産及販賣量

生産量	760,000噸	製 品	56,000噸
販賣量	551,000噸		48,000噸
同 價	147,884,000幣		108,827,000幣
邦 貨 換	3,990,000圓		2,938,000圓

以上原礦中最生産量の重要なものは褐炭、黄鐵鑛、鐵鑛、クロム鑛、金剛砂等にして製品中の主なるものは鉛及石灰性、マグネシウムにして、前記原礦中褐炭は國內消費に、諸鐵鑛は獨、伊等に、クロム鑛は米國に輸出せらる、諸鑛物の生産量次の如し

○1913 年及 1929 年希臘鑛物生産量

		(量單位噸價額單位 1,000 幣)			
品 目		生産量		1929 年	
原 礦		1913 年	1929 年	販賣量	價 額
鐵 鑛		310,078	253,025	206,316	25,165
亞 鉛		30,717	29,011	2,602	1,064
含 硫 鑛		38,046	8,407	8,039	2,816
ク ロ ム		6,342	24,214	21,618	22,034
マグネシウム		98,517	84,023	18,625	8,251
リグナイト		170	156,526	156,307	37,335
金 剛 砂		5,560	10,560	17,112	20,805
黄 鐵 鑛		26,013	133,399	119,733	29,946

(備考) 土石類は上記表中包含せず、而して土石類の

1929 年中販賣總額約 32 萬圓にして、内大理石 27 萬圓を占む

	▲製 品		1929	
	1913年	1929年	販賣量	價額
鉛	18,309	5,361	5,612	51,216
電 爐 石 灰	20,646	6,237	6,713	5,398
亞 砒 酸	—	763	710	4,156
マグネシウム	29,852	32,602	24,822	38,507
變性マグネシウム	1,963	1,249	1,039	1,931
軟性セメント及固形アスファルト	—	2,250	2,207	2,207
混 種 酸 類	—	1,929	1,855	4,866

(備考) 土石類は上記表中に包含せず

最近本邦に對しても輸出を見るに至りたる、當國金剛砂の 1929 年に於ける輸出先別次の如し

輸 出 先 別	輸 出 量 (單 位 噸)
英 國	2,575
北 米 合 衆 國	2,300
佛 蘭 西	4,869
獨 逸	2,642
瑞 士	40
伊 太 利	675
和 蘭	2,645
國 內 消 費	1,437 (本邦への輸出量は此中に包含す)
計	17,183

鐵石の産地は(イ)鐵鑛は アテネ附近、ロリアム、アトランチ地方、キトノス、セリケオス、イカリア、スキロスの三島及クリート島、(ロ)金剛砂はナクソス島、(ハ)クロームは中東部地方(フテリ、ツアグリ、ラミア地方)
(海外經溫事情 4 30)

内外最近刊誌參考記事目次

- **Steel. June 11, 1931**
Electric Power in Steelmaking—An Industry Is Transformed. E. F. Ross. p. 31~36
- **Steel June 18, 1931**
Status of the Welded-on Overlay. Miles Catlin Smith. p. 39~42
- **Steel June 25, 1931**
Tool steel Analyses and Applications. part 1. W. H. Wills. p. 31~32
High-Speed Steel Mill Drives Require Better Lubricants; Ralph C. Walter. p. 33~34
- **Steel July 2, 1931**
Good Weldability Spurs Use of Chrome-Nickel Steel. G. Van Dyke. p. 52~53
Welded Barges of Cell Type Hold Promise for Steel. H. R. Simonds. p. 55~56
- **Steel July 9, 1931**
Crankshafts. Are Cast from Alloy Steel. H. M. Heyn. p. 31~32
Modern Tool Steel Analyses and Applications.

- Part II. W. H. Wills. p. 33~38
- **Iron Age. June 11, 1931**
Larger Steel Ingots for Forging. Heobert H. Ashdown. p. 1888~1890
Pulverized Coal Experiences in a Malleable Iron Foundry. C. F. Herington. p. 1896~1901
Rustless Steel-Their Fabrication and use. T. Holland Nelson. p. 1908~1912
- **Iron Age. June 18, 1931**
Seamless Tube Mills at McKeesport. Sidney G. Koon. p. 1963~1966
Loss of Heat and Life of Roof of Open-Hearth Furnaces. Dipl. Ing. Albert Schlüter. p. 1976~1978
Chromium Plating for Wear Resistance. Robert D. Zimmerman. p. 1982~1984
- **Iron Age. June 25, 1931**
Hard Facing Is Increasing Output and Cutting Costs. W. A. Moore. p. 2055~2056
- **Iron Age. July 2, 1931**
Advantages of Twin-Motor Drive for Rolling mills. R. H. Wright and H. E. Stokes. p. 12~14
A Thermal Stude of An Open-Hearth Furnace. William M. Henry and Thomas J. McLoughlin. p. 22~25
- **Blast Furnace and Steel Plant. June. 1931**
A Review of Certain Gas Producer Practice. victor Windett. p. 817~820
Algoma Steel Corporation Modernizes Rail Mill. A. F. Kenyon. p. 832~835
Ladle Design and Service. Part II. J. H. Hruska p. 836~838
Blast Furnace Gas In the Steel Plant. C. B. Thorne p, 839~845
Refractories for Steel Pouring Equipment. R. H. Stone. p. 865~871
A Study of Refractory Materials. Colin Presswood. p. 875~876
- **Metal Progress. July. 1931**
Ghosts in Large Steel Forgings. J. Fletcher Harper and Harold I. Stein. p. 45~49
Iron, Carbon, Nitrogen Structural Analogies Revealed by X-Rays A. Wesigren p. 50~54

- Crucible Tool Steel Melting. Owen K. Parmiter. p. 55~53
- Chromium Iron Alloys Have Remarkable Properties. Charles A. Scharschn. p. 59~63
- Mechanical. Pickling. C. Weaver. p. 64~67.
- Die Casting Brass and Other New alloys. Charles Pack p. 72~78
- **Korrosion und Metallschutz. June 1931,**
Korrosionserscheinungen, im Schiffbau. M. P. Andreae, Hamburg. s. 125~134
- Die Oberflächenveredlung von Silberwaren. H. Moser und E. Raub. s. 134~139
- Das Metallspritzverfahren als Schutz gegen Korrosion. Herbert Pauschardt s. 139~145
- **Stahl und Eisen. 2. Juli, 1931**
Zur Erinnerung an das 50jährige Bestehen der Zeitschrift. s. 817~853
- **Stahl und Eisen. 9. Juli, 1931**
Über Abmessungen und Leistungen der Wärmespeicher ober-schlesischer Siemens-Mastin-Öfen. Dr-Ing Fritz Wesemann in Gleitz. s. 873~883
- Verhüttung von Schmalkammerkoks an der Saar. Ewald Bertram s. 883~885
- Hartzinkbildung und Eisensalze. Karl Taussig s. 885~886
- **Stahl und Eisen. 4. Juni, 1931**
Beherrschung der Überströme in Hüttenwerksanlagen. Eberhard Courtin s. 702~710
- Eigenschaften beruhigt und unberuhigt vergossenen Stahles. Wilhelm Örtel und Alexander Schepers s. 710~715
- Über das ternäre System Eisen-Kohlenstoff-Vanadin. Rudolf Vogel und Erich Martin. s. 715.
- **Stahl und Eisen. 11. Juni, 1931**
Mögliche und zweckmäßige Güteanforderungen und ihre Steigerung durch die Massenerzeugung. Karl Schimz in Neusz. s. 729~734
- Die Entwicklung der Stahlbanes in Amerika. Otto von Halem. s. 734~739
- Untersuchungen über die Stückigmachung von Siegerländer Feinspat durch Verkoken mit Kohle. Walter Luyken in Düsseldorf und Erust Bierbrauer in Leoben s. 739~740
- **Stahl und Eisen. 18. Juni 1931**
Hochleistungs-Kühlbetten. Emil Kästel in Magdeburg-Sudenburg. s. 764~767.
- Entwicklung der Fenerungen in Eisenwerken unter dem Einfluss der Ferngasversorgung. Dr.-Ing. P. Rheinländer in Altena. s. 767~769
- Der Rotbruch des Stahles durch Metalle. Hermann Schottky Karl Schichtel und Rudolf Stolle in Essen. s. 769~770
- **Stahl und Eisen 25. Juni 1931**
Wärmetechnische Überwachung einer elektrischen Gichtgas-Reinigungsanlage. Dipl.-Ing. Siegfried Hinrichs in Georgsmarienhütte. s. 788-790
- Über die Eutkohlung von Kohlenstoffstählen beim Erhitzen in Salzbadern. A. Senthé und E. H. Schulz in Dortmund. s. 790~793
- Über das ternäre System Eisen-Schwefel-kohlenstoff. Rudolf Vogel und Günther Ritzan in Göttingen. s. 793~794
- **Die Giesserei. 12. Juni 1931**
Beiträge zur Frage der Primärkristallisation. II. Dr. Willi Claus, Berlin, und Dr.-Ing. Robert Hensel, s. 476~482
- Schablonenmäßige Herstellung der Form zu einem schalenförmigen Untersatz. R. Löwer, Frankfurt a. M. s. 482~483
- **Die Giesserei. 19. Juni 1931**
Kuhlen und Schmierer bei der Guszeisenerzeugung. A. Wallichs. und K. Krekeler. s. 493~496
- Über die „Graphitizierungskurven“ nach N. Hekker. A. Mery. und H. Schuster., Clausthad. s. 496~498
- Beiträge zur Frage der Primärkristallisation II. Dr. Willi Claus, Berlin, und Dr.-Ing. Robert Hensel. s. 499
- **Die Giesserei. 26. Juni 1931**
Die Handhängebahn für den Gießereibetrieb. J. H. Wendeler, Ingenieur VDI., Köln. s. 513~515
- Kennzeichnende Eigenschaften von Gießereikoks Dr.-Ing. F. Brinckmann und Dr. phil. Nehmitz. s. 515~516
- Das Plattieren von Eisen- und Stahlguss mit Kadmium. E. T. Richards., Berlin. s. 519-518
- **Die Giesserei. 10. Juli 1931**
Warum Fliesarbeit? Willi Prox, Direktor der Julins Pintsch A.-G. s. 553~558
- Die Verwertung von Messingblechabschnitten undspänen, in der giesserei. E. T. Richards, Berlin. s. 558~561